

## 第二の故郷

――日本にいる

(1906' 6 - 1911' 秋)

### 一、第一瞥の印象

1906年6月に、周作人は魯迅及び二人の同郷と共に紹興から出発、上海経由で東京に行く。――本当に征途に立った時も、周作人は尚思郷の心情に纏われて、なかなか抜け出せなかった。夜、航船が向かいから来た船に出合った際、船夫が例のように濃厚ななまりを帯びた声で呼びかけた。――その光景は五年前周作人が紹興から南京に行った時と同じような気がした。しかしこの時の周作人がそれを聞いて、全く別な気持ちになった。同行の兄も同じく沈黙していた。――彼は命を奉ず、結婚させられたところで、痛苦と憎恨に圧迫され、口も利かなく、笑いもしない。更にこの待ちに待って、やっと来た旅に見えない重苦しさが加わった。

しかし。船が呉淞口（上海の港）を出て、周作人は一人で甲板に立って、海に臨んで、茫々とした遙かな遠方（あそこは彼の想像した日本）を眺望したとき、彼はまた一種期待の興奮を感じた。1906年はちょうど明治二十九年で、日露戦争が終わった一年にあたった。尊大横暴を極めたロシア熊に勝つたため、同じく民族自存を切に求めている中国知識人の目にすれば、日本はにわかになんか幾分神秘的な色彩が加わった。即ち、この東方の隣国は一体どんな秘密な武器を握って、充分に西洋列強と対抗できて、自国を世界民族之林に自立させたのか。

その故に、当初東京に着いた日の夕方、周作人は魯迅について、魯迅が寄宿している本郷湯島二丁目の伏見館に来た時、好奇心に満ちていた。声に応じて出てきたのは十五六才の日本人の少女だった。――魯迅の紹介によると、それは館主の妹で女中の仕事を兼ねていた乾菜子である。彼女はお客さんに手荷物の運びとお茶を入りに来たのだ。周作人はただ彼女に一瞥を投げただけで、驚いてしまった（愕れてしまった？）――彼女が見たのはなんと素足なのだ、自然になよなよと部屋の中を行ったり着たりした。周作人はすぐ故園水

郷の女性たちを思い出した。彼女らもよく素足だったのだ。その有名な『江南好』という詞も同時に頭の中で浮かび上がった。「江南好、大脚果如仙。衫布裙綳腰。翠、環銀釵玉鬢花偏。一溜走如煙。」周作人は思わず微笑んだ。この瞬間、緊張、好奇……皆消えてしまった、ただ少し淡々とした暖かい気持ちに包まれただけだった。周作人は更に、一切起こっていない、彼が海を渡って知らない異国に来ていない、まだ自分の故郷の親しい人の中にいると感じた。目の前のこの彼が初めて見た日本人、この「乾栄子」といった少女でも彼に娯園に住んだ麗従姉を思い出させた。その年、伯父さんの一人息子の結婚式で、大家族の従兄弟皆集まった。密かにその美しい麗従姉への恋いを抱いていたため、自分のことを「醜小鴨」（醜い家鴨の子）と思った周作人は宛も何気ない顔のように彼女の一枚の藤色の緞子着物を手にとり、それを着て躍ったり、舞ったりしていた。今ここでこの時、周作人は乾栄子への一瞥で、なんとそれと似たような乱れと興奮が起きた。しかも不思議なことに、周作人ははつきり乾栄子の顔を見ていない、朦朧な姿しか残っていない、一足の素足が目の前に跳躍したり、閃いたりするだけだった。……

周作人は本当に何かが好きになったか。彼も一時はつきり言えない。この少女が好きになったか、それとも彼女の祖国が好きになったか。いずれにしても、周作人は当時ただ親切を感じたにすぎない。後で、前者に対する愛については、周作人がずっとひた隠しに隠していたので、ある文章の文字からその雰囲気がかすかに（漂っている？）透き見できるだけだ。だから、我々の以上の描写も推測の部分が多い。後者に対して、周作人は却ってしばしば言及している。ずっと三十年後になっても、周作人は日本紀元2000年のために作った記念作『日本之再認識』の中でも尚日本の「素足の美」を興味津津々語っている。「私は日本民間の素足の風俗があくまでも極良いと思う。出かけるとき勿論下駄か草履で、室内の行動は素足か足袋で、これは実にとっても健全なとても美しいことだ。私が嫌悪した中国の悪俗の一つは女子の纏足なのだ。だから、封建に対する反動的な者はいつも素足を賛美するのだ。両足白如霜、不著鴉頭襪といった句を思い出して、やはり青蓮居士が人格者で、中国の古人の中でも珍しい……」。

そのように、周作人は普通の日本人の日常生活習慣の中で敏感で鋭く日本文化のある神韻を会得した。而も、彼は中国文化の中で既に消えてしまった（もっとひどいものになると反対側に走った）ある習俗、伝統が依然と日本に保存されていたのを何となく感じ取った。

この発見が周作人にもたらした喜悦が言葉にできないものだ。

周作人は魯迅の寄宿処――二回の南向き側、西端に近い部屋に安置された。彼が周りを仔細に見渡すと、また新の驚異を起こした、床に畳しか敷いていない。あとで、周作人は初めて知っていた。一枚の畳は長さ $2\frac{1}{2}$ メートル、幅 $1\frac{1}{2}$ メートルで、部屋の広さが其の枚数によって計算するのだ。魯迅の部屋は約四畳間で、面積はただ $9\frac{1}{2}$ 平方メートルしかない。維摩のちっぽけな部屋よりも十分の二狭い。室内窓には格子がついていて、薄手の紙が貼ってあって、紙窓と称してもいい。他のは両面に暗色な厚手の紙が貼ってあって、間隔として、紙屏といえる。室内にはまた「閣」がある、即ち押し入れなのだ、上下二層に分かれて、それぞれ布団及び衣服雑物などが収納できる。床にすのこもあって、壁龕と同じ大きさだが、寝る処ではなく、本や雑誌などの置き場だ。その他、小さな机と二三枚の座布団しかない。机は特に小さい、他の人の普通大体長さ $100$ センチ、幅 $30$ センチだが、魯迅のは長さただ $60$ センチ、幅半 $50$ センチもない。机に小さな引き出しが二つあって、中に挟みとか腕時計とか小銭などが入れてある。机の上には長方形の小硯があつて、木の蓋も付いている。普通日本の小学生用のものなのだ。室内にテーブルや椅子やら筆筒やら箱やらぎつしり詰まったのに慣れた中国人にとっては、このような設備はちよつと粗末すぎる。しかし、一、二日泊まったら、周作人はすぐその実用性（適用性？）を実感した。机の前に座つて、読書したり字を書いたりするとき、前後左右あらゆる空間に書卷、紙などが置ける、大きな机に相当する（あたる？）。客が来れば、畳に座つて、六、七人でもきつくはない。疲れたら、そのまま横になって、他にソファーなんかいらぬ。深夜押し入れから布団を取り出して掛ければいい。如何に随意簡便なのか。周作人は思わず遠く思いを馳せた。もしこの部屋が山の村に位置すれば、窓際に立つて山を眺めたり、浴衣を着て横になって、お茶を味わいながら、森にかすれた風音と流れ水の音を静かに聴いたりして、又昔ののんびりした閑適の風趣を楽しめる。だから、周作人は再び日本の簡素適用の家屋が簡易な生活に特に便利だと感じた。それは幼年時代から既に慣れた郷人の「簡単な中に真味がある」生活方式との間に、何か内在的な相通点がある……

大家さんが毎日の食事を運んでくる時、周作人は更にこの親切感を深く感じた。正直に言えば、日本の下宿生活が相当清貧であり、毎朝、バターつきのパン二枚、昼食と夕食の二食は大根、竹の子の他に、肉は極珍しい。平日の肉はただ豚肉、牛肉と鶏肉で、羊肉は

売っていない、鵝や鴨もあまり見えない。中国の留学生は日本に来て、あっさりした淡泊な簡素な日本料理を食べたとき、よくたいしたことでもないのに苦しいと言ったりしたが、周作人は苦とは思わないで、却ってそれを特別な風趣だと思った。彼は「私の故郷が窮苦で、人々は日に三食に努力して、大体漬け物、臭豆腐、タニシぐらいのものをおかずとした。だからしょっぱいや臭いものに平気で、そして油もそれほど好まない。」。日本のあっさりした茶飯をすると、却って大変おいしく食べる。日本料理のもう一つの特徴は「冷」である。周作人が下宿した伏見館では暖かいご飯を提供したが、当時日本の一般的な中下階層の家庭では大抵朝ご飯しか作らない、家族の人は官吏でも教員でも工匠でも学生でも皆「弁当」を持って出かける。弁当の自身は白ご飯、おかず、魚、或いは梅干し一個か二個ぐらい。夜帰ってきてても晩ご飯を作らないで、朝残ったものを食べるだけの家庭もある。冬夜の寒さに苦しいなら、熱いお茶をご飯に入れて、漬け物などと一緒に食べる。それも淡泊で甘香な風味がある。食べ物に対して、中国人は多分暖かいのほうが好きで、冷たいのは苦手で、留学生は「弁当」及び茶漬けの食べ方を見たら、頭が痛くない人はいない。でも、周作人にとって、却って彼の幼時の記憶を喚起した。十二三歳の頃、彼は杭州で祖父に陪侍し、毎日一食はお粥、後の二食はご飯の定食だったが、物足りなくて、冷飯を食べるしかなかった。こっそり台所に行って、かかっていたご飯箱から大きな塊を選んで口に運んだ。その時「この白ご飯がくらべものがないほどおいしくて、一生食べたものの中で最も美味なのだと言える。」と思った。今思い出すと、悲しみでも、少し甘みでもある。「菜根が嚙れば、百事ができる」といった中国の昔話を連想して、周作人は更にここに「ある人間（中国人でも日本人でも）共通な人生哲理が含まれたと思った。そうであれば、もっと味わうだけの値打ちがある。」

食事に精通する周作人はこのように日本の食事の中で一種新たな趣味を発見した。伏見館で落ち着いてから、彼は魯迅について、あちこちを歩いて、日本の食べ物の美を捜しまわった。当然収穫があった。湯島から遠くない青木堂で豚肉の「琉球煮」を売っていた。実は煮方もそれほど特別ではない、大抵中国と同じぐらい、ただ砂糖を使わない点は多分紹興に似ている。本郷の小店で委託販売の大垣名物柿羊羹を買ったことがある。真ん中を断ち割った孟宗竹に入れて、上に竹の葉っぱを蓋にした。本当に安くておいしい。本郷三丁目の藤村製の栗饅頭と羊羹が割りに有名で高い。豆と米で作ったものだが、優雅な形と

色、素朴な味は茶食の資格にはとてもふさわしい(あう?)。いろいろな羊羹は大いに特殊な風味がある。最も普通なのは落花生であり、何処の小店でも買える。…周作人は考証の興味まで湧いた。彼は落花生が中国の伝説によると扶桑から来たが、日本では俗名が南豆なので、中国からのものと暗示していることを発見した。これと同じような例もあった。同じ瓜で、中国では倭瓜(南瓜とも通称する)と呼ばれるが、日本では唐茄と称する。羊羹は「製出唐浮屠」、日本に伝わった後、日本の特産物になったが、中国で却って伝承できなかつた。また日本から再び中国に逆伝わって、東洋のお菓子になった。周作人はここから考えの方向(筋道?)を開いた。日本の「あるものは故郷の何物と比べられる、あるものはまた中国の何処かの何物である。こう考えれば、とてもおもしろい。例えば、みそ汁と乾菜湯、金山寺味噌と豆板醬、福神漬と醬塊(大頭菜)、牛蒡独活(独活も野菜)とアスパラガス、塩鮭と鱈鱒(ヒラの干し物、肉は赤く鮭に似ている)、皆似た食べ物だ。または例えば、大徳寺納豆は即ち塩焜、沢庵漬は即ち福建の黄土大根、蒟蒻は即ち四川の黒豆腐、刺身は即ち広東の魚生、鮓は即ち古昔の魚鮓、その作り方は『齋民要術』に載っている。食事の中にもまた文化交流の歴史も含めた。」つまり、周作人は求めるのは日本の食物の美だけではなく、さらに中日文化交流史の一ページ一ページ趣に富む記録なのだ。――これは確実「食べられるのみではなく、もっと思索できる。」のだ。

そういうように、周作人は日本に着くと、魯迅と同じように、とても自然に「完全日本化」の生活方式を選んだ。彼は後で「多くの留学生は日本の生活に慣れなくて、下宿で机や椅子を使う。ベッドが買えない人は押入れの上段に入って寝るまでした。温かいご飯でなければ食べないなんて、このような人らはよく私たちに嘲笑される(からかわれた?)。というのは、苦勞できなければ、わざわざここに来る必要もない。しかも、せっかく日本に来てただ技術をちよつとだけ覚えて帰っても、結局皮相なものにすぎない。生活から体験しないと日本の事情を深く知ることができないのだと私たちは思うからだ。」と思ひ出して語った。周氏兄弟は当時日本の普通な下宿に泊まって、学校に行くと制服を着る。普段は着物と下駄、雨のとき皮靴だったが、後にも足駄に変わった。一日二食は下宿の定食で、学校に弁当を持っていく。要するに、衣、食、住の各方面で全部日本生活を過ごした。何の不便もないどころか、なれてきたらとてもおもしろく思った。ここでは日本の普通な人、民生活に対する切実な体験を含めただけでなく、日本生活の中に残った中国の古俗、中

国民間の原始的な生活方式に対する再経験でもある。それを通じて、自然にある心霊の合致に達する。周作人は「私は東京に六年住んでいた。その間一回も家に帰った事がない。私は東京を第二の故郷と言ったのもこの故なのだ。」と言っている。彼は又「私たちは日本にいた感覚は半分は異域であり、半分は古昔でもあった。しかしこの古昔が猶健全に異域で生きているので、夢幻のような空虚ではない。」と言った。この感覚は真実なのだ。ただ第一瞥の印象にもかかわらず、周作人にとって、日本は既に神秘的な異郷ではない。一般の留学生は日本文化が西洋から受けた影響に注目し、中日文化の差異を強調しがちに対して、周作人は中日文化の交流と共通に着眼した。この面から言えば、周作人の第一感覚が独特なものだ。

## 二、買書、読書と訳書

伏見館に泊まってから、一番やることは日本語を勉強するのだ。それで、中華留学生会館によって作った講習班に入った。だいたい週に三、四回授業に行けばいい。一つは怠けで、もう一つは先生はゆっくりして、なかなか授業が進まないため、何回か欠席しても大丈夫で十分間に合う。お互いにいい加減した。二年目はまた改めて法政大学の特別予科に入った。授業は日本語及び英語、算数、歴史など平易な科目で、周作人は前多少習ったことがあるので、聞きに行く興味がなかった。一年の学費を支払ったが、事実上学校に行く日は合わせてなんパーセントしかなかった。でも試験ではなんと二番目といった良い成績だった。学校の講義には興味が無いが、日本語を教える何人かの先生は周作人に良い印象を残した。三十年後、周作人は『市河先生』というタイトルの文章を書いた。当年の先生のことを「旧式な好人物の模型に近い。」と称頌した。そしてこのような人物が「おそらくしだいに少なくなっていく」ことを「惜しい」と表示した。

学校の講義は平淡だが、周作人周囲の留学生生活はにぎやかで、戯劇性に充ちた。周作人が東京に來た翌年の夏、徐錫麟が恩銘を刺殺することに失敗したので、心臓をえぐられた事件が起った。しばらくしてから、また秋僅が殺された消息が伝わってきた。皆紹興同郷なので、当然のこと、紹興の留学生の中で強烈な反響を起こした。紹興同郷会によって

行われた抗議会で、満清政府に電報を送るかどうかに回って、激烈な論争を展開された。徐錫麟事件後、魯迅、周作人が引越した新居、本郷東竹町の中越館を訪れる客が急に増えた。そして大体革命事件と関わりのある人だ。まずは東湖里で徐錫麟と一緒に「路上急襲」を練習して、紹興城内で蜂起するつもりだった陳子英で、彼は紹興で警報を聴いて東京へ逃げてきたのだ。次は浙江省の緑林豪傑を遊説して、蜂起しようとした、「煥皇帝」と別号した陶煥卿である。または彼の本家の陶望潮も、後に章太炎の娘の婿になった巖末生もその時革命事業にとっても熱心で、よく話し合いに来たりした。陶煥卿はある日急いで走ってきて、周氏兄弟に連絡用の革命文書を保管してもらったことまであった。魯迅もまさにこの時期、秘密に光復会に参加して、革命党の一員になったのだ。

周作人はこれらの革命友達のことを感心も同情もした、晩年になっても、彼はなお文章を作って、陶煥卿のことを「刻苦で苦勞に耐える、仕事も真面目だ」、また其の疲れ知らずな革命精神などを称えた。彼自身もよく友達の談話に参加したが、ただ談話に止まるだけだった。革命の実際行動には、周作人は既に昔のような熱情を失った。多分、周作人が終始これらの東京友達との間に一定の距離を保ったこそ、彼は人に「かなり高傲で、鶴のようだ」という印象を残していた。魯迅はこれで周作人に「都路」（日本語の鶴）という渾名を付けた。周作人は解放後、上海の『亦報』に文章を書いた時、「鶴生」という筆名を使ったのはその話から来たのだ。――勿論、これは後話だ。

周作人が憧れたのは相変わらず世間事を問わず、悠々と自在な読書生活だ。彼のこの理想は日本に来てからこそ、初めて実現の機会ができたと言うべきだ。当時の中国ではもう平靜に読書できる机は一つも得られない、中国の現実社会に身を置くと、耳を塞いで目を閉じて一切問わずのは殆どあり得ないことだ。日本にいる時だけは、中国の現実社会と割りに隔離して、暫時現実の醜悪を忘れて、美の印象を保存しやすいのだ。または、周作人は日本にいと、どんなことでも（特に対外交渉）すべて魯迅がやってくれて、自分でなんの煩わしい事も抱えないで済ませるのだ。アパートの持ち主或いは警察の虐めにあったこともなければ、更に魯迅が遭った日露戦争中中国人を殺す刺激のような国際事件に遭ったこともない。兄の保護のおかげで、周作人は日本で自足、平穩、清閑、無憂無慮な日々を過ごせた。

その時、周作人の生活中、唯一でも最も主要な趣味でもある事は書店を見回るのだ。

東京の書店も確かに魅力がある。著名な日本橋三丁目にあった丸善書店の他に、周作人先後泊まった伏見館、中越館及び1909年初引越した「伍舎」(本郷西片町十番地丙字19号)の付近、神田、本郷一帯だけでも、書店や露天の書店がたくさんあった。一軒ずつ見て行けば、気づかないうちに大半日の時間をかけてしまった。それも一種暇つぶしの方法なのだ。行く回数が多くなってきて、書店それぞれの個性も知っているようになった。時に目を閉じて、想像すると、まるで一人一人の人間のように目の前に立っていて、指摘や評品されるのを待っている。かなり情緒がある。例えば丸善書店は二回はそれほど広くない、四壁は本棚、真ん中は長い机が幾つもあった、上に新書が並んでいて、客が自由に読める。よく本棚の裏の隅に立って半日も本を探しても誰も注意してくれる人がいない、本を一、二冊選んで会計しようとして、まだ人はいなくて、高声で店員を呼んでくる。或いはあのあまり歩かない店長の下田さんが自ら会計に来る。このようにあまり客を監視しない君子風が人を愉快させる。神田一帯の書店はそうではなかった。多分あそこは学生が多すぎて、良いのも悪いのもあって不揃いなのだ。書店の店長も店員も更にこずるい、机の一隅に跪いて座って、目線が光に満ちて、人を監視した。魯迅はまるで大蜘蛛が網の中心にいるように、確かにちよつと恐ろしい光景だと言った。

神田にある中西屋といった西洋書の専門店が周作人のアパートに丸善よりずっと近いが、周作人らは余り行かない、店員が余りにもきついから。或知名な文人がそちらに入って本を読んだが、監視されすぎて、怒ってしまった、あなたらはお客がみな泥棒だと思っているかと怒鳴ったそうだ。それは多分所謂警察式の店風だろう。「警風」と略称してもいい。勿論、何回かやりとりして、少し知り合ったら、情況がずっと良くなる。同じく神田にある相撲屋のご主人の小沢民三郎が読者のために喜んで丸善へ本を取りに行く(彼が嘗て丸善で修業したことがある)。だから周作人の信用を得た。辛亥革命前、周作人は故郷に帰ってから、ずっと1916年に小沢さんがなくなるまで、一切の洋書と雑誌の購入も全部彼に任せた。そのほか、本郷の南江堂はドイツ語の本で有名だった。東京堂はよく日本の新刊書と雑誌がそろった。文求堂は中国語の古本が多かった。郁文堂、南陽堂本支店は洋書で有名だった。それぞれの特色のある書店でもあり、魯迅や周作人(許寿裳も)がよく通った書店でもあった。財布に少しお金が入ると、腕がむずむずするようについ書店に行ってしまった、いつも財布が空になってから帰ってくる。そして、お互いに見ながら「また

やった！」と笑った。ユーモアな口調でもありますが、苦味も入っていた。それは所謂貧乏な学生の苦の趣味だろう。それにしてもこの苦の趣味もよくあるわけではない、毎月三十一元の留学費用は生活だけでもギリギリで元々本を買う余裕がないから、財布が空で書店を見回る場合が多かった、子どもが駄菓子屋の屋台を通ったときの気持ちのように、しかたなくがっかりして帰ってくる。それは更に幾分惆悵を加えた。

本を買うのは当然読書のためだ。それこそ本当の楽しみにある。ましてこれらの本は国内で絶対買えないし、聴いたことがないものもある。近代日本はもとより世界の窓口という美名がある。日本の出版界、読書界は西洋の思想文化潮流に特殊な敏感がある。新書が出たら（特に時代風気を影響する著作）、直ちにいち早いスピードで翻訳、出版する。これは新大陸を発見したばかり、西洋文化に飢渴感に充ちた周作人にとって、言うまでもない極大な便利と誘惑なのだ。周作人は後でわざわざ『旧書回想録』『書房一角』に収録）、『私の雑学』（『苦口甘口』に収録、後ほど『知堂回想録』に転録）などの文を書いて、少し愛恋を抱いて、当年日本で買書、読書の歴史を思い出している。一冊一冊の本は彼に新たな世界を開いた、それからの人生道路の選択にも影響を与えた。だから、この東京での買書、読書の歴史は外来文化の接受史として、ひいては周作人の思想発展の歴史として読んでもいいのだ。

周作人の思い出によりますと、彼は1906年に東京に行ってから、本郷相撲屋古本屋で初めて買った小説はハンガリー作家育珂摩耳の原作で、米国の薄格思訳の『罽躑所説』だった。ハンガリーは人に注意されにくいぐらいの弱小な国だ。育珂摩耳がハンガリーの司各特と称される著名な文学家でもあり、革命家でもあった。だから周作人はまず育珂摩耳の作品を選んだのは間違いなく彼の読書興味と眼光の重要な転換を標示した。前も言ったように、南京勉学時期の周作人は当時の多くの知識青年と同じく、梁啓超、林琴南の影響で

『福爾摩斯探案集』の「変幻」と英国哈葛徳の小説の「ロンドンミスの纏綿とアフリカ野蛮の奇怪」に夢中した。これもその時代の読書風潮を反映した。今、東京留学生界に広がった強烈な民族主義情緒の感染で、周作人が目線を中国と同じように帝国主義に圧迫されている東方の弱小な国家に移したのはとても自然なことだ。まさに魯迅が言ったように「探偵、冒険家、英国ミス、アフリカ野蛮の物語はお腹いっぱい食べて、酔うまで飲んで、脹

らんできた身体に痒きを搔くようなものにするほかならない。だが、われわれ一部の青年は既に圧迫を感じた、痛苦しかない。彼らはあがこうとしていて、痒いマッサージなんか要らない、切実な指示を探している。」。周作人は後で思い出して、「その時私の志向と趣味は所謂大陸文学であり、或いは弱小な民族の文学だった。ただ英文を仲介の媒酌人として借りただけだ。……ロシアは弱小ではないが、その時ちようど専制と革命との対抗時期なので、中国人は自然にそれを同病の仲間とした。弱小民族は多分後につけられた名称だ。実に私たちは好きだったのが正に圧迫された民族の文化なのだ。」と言った。当時、日本の文壇では馬場孤蝶等の人が大陸文学を論じていたが、英訳本はまだ書店であまり見えなかったのも、なかなか見つけれられない。ロシアの小説が尚何種類か買えるほかに、東欧、北欧の小説はほとんど見えない、英訳本はそもそもとても少なかったから。周作人は仕方ない、英国倍読の『小説指南』を参照して、書名を抄写しておいて、丸善書店に注文してもらった。かなり時間も手間もかかって、やっと何種類かポーランド、ハンガリー、フィーランド、ギリシア、？、？の作品を手に入れた。特にハンガリーの育珂摩耳の小説は英訳本の印刷も装丁も極凝ったものなので、ずっと周作人に「蔵書中の佳品」として珍藏された。そのほか、周作人に深愛された作家はまたロシアの果戈理と伽爾旬、ポーランドの頭克微支がある。周作人は彼らの作品は十年ぶり読んでいなくても、心の中では尚永遠に忘れられない？も畏敬するほど敬服したから、却って一向めつたに勝手に読まなくなって、だんだん離れていったと言った。周作人はもう一つの趣味が文学史の著作を読むことだ、彼自身の回想によりますと「Morfllの『文学小史』、克羅芭金の『ロシア文学史』、Brandesの『ポーランド印象記』、Emil Reichの『ハンガリー文学史論』など、これらは皆四、五十年ほど前の古本だが、私にとってとてもよしみがある。当時読書の時の感激を回想すると昨日のことのようにありありと目の前にあるような気がする。私に与えたすばらしい影響は終始失われていないのだ」と言っている。周作人はここで言った「よしみ」はとも意思がある。彼は他の文章でそれを「結縁」とも称している。周作人及び現代中国知識人はまさに文学という絆を通じて、世界の圧迫された民族と離れにくい縁を結んだと言える。これこそ本世紀中国は世界に向かって進む極重要な一面である。

周作人は東京に着いてから、まもなく下宿で丸善書店から届いた小包を受けた。それは魯迅が帰国前注文した西洋本だった。中では米国のG ayleyが編集した『英文学中の古典

神話』が周作人の注意を惹いた。周作人はこの本を通して、初めてギリシア神話の大概が分かった。巻首の説明及び古今各派の異なった解釈はまた周作人を？の人類学派の知識を獲得させた。その後、しばらくして周作人は中西書屋で売っていた「銀彙書」の中から『習俗と神話』と『神話儀式と宗教』を買取った。？の人類学派の発見は周作人一生の文化選択と人生選択に対して、疑われない根本的な転換をもたらした。周作人自分で言ったように「私は？の人類学派の解説のおかげで、神話及びその同類の故事が分かっただけでなく、文化人類学も知っていたのだ。」。だが「私は人類学に少し興味があった原因は学ぶためではなく、大抵人のためだけだ。」。前述のように圧迫された民族の文学の発見をきっかけに周作人は中国の伝統文化の中の家族本位主義を突き破って、20世紀世界性民族解放運動の潮流と精神的な呼応を取得したと言え、現在、人類学の発見によって、更に周作人に国家、民族の狭い範囲を突破させて、人間自身に対して思考させる段階に入った。これは「人を人にしない」のを主要な特徴にした中国専制主義伝統文化に対する更なる根本的な否定だけでなく、20世紀世界性的人の覚醒と解放の潮流も融合して、もつと高い境界に達した。周作人は人類学から出発し、人に対する認識を巡って、知識の触覚を相当広い領域に伸ばした。これは道德觀念起源發展史、生物学、性心理学、児童文学、童話学、医学史、妖術史、民俗学等新しい現代学科を含めた。彼が専念にそれらの学科に関する多くの經典的著作を研究した。例えば、J.G.Frazer の『金枝』、Have-lock Ellis の『性心理研究』、Westermarck の『道德觀念起源發展史』、Gilbert White の『色爾朋の自然史』、Hardland の『童話の科学』、Macculloch の『小説の童年』等。周作人はそれで眼界を大いに広めた、精神的大解放を獲得した。それによって起こった思想の振動は顕然南京勉学時代読んだ『天演論』がもたらした振動を超えた。周作人はこっそりHave-lock Ellis の『性心理研究』を「私の啓蒙の本」と称している。「私はそれを読んで、眼の上の鱗片がたちまち落ちてしまったような気がした。人生と社会に対して、一種見解を成り立った。」。その話は言い過ぎない、周作人一生の思想文化活動が正にこの時期の幅広い閲読を基にしたのだ。

閲読の興味から翻訳に移ったのも自然なのだ。魯迅の促進作用も無視できないようだ。雑誌を創刊、出版して、新たな文学活動を始めるのは魯迅が1906年春、仙台医学校を退学した後決めた新方針だ。『新生』といった雑誌を作ろうとしたとき、周作人は言うまでもない魯迅の最忠実な仲間だった。発起人が五人の予定だったが、結局三人しか残っていない

かった。その中は周作人が入っていた。彼はわざわざ『新生』のために『三辰神話』といった文章を書いた。『新生』が夭折したことで、魯迅は「身を果てのない荒原に置かれた」ような「寂寞」と感じた、そして「この寂寞はまた日々伸びてきた、大毒蛇のように、…魂を付き纏った。」。その時、黙々と魯迅を支えたのは周作人しかない。周作人は後で彼ら兄弟と一緒に翻訳に従事していた光景について、こういうように思い出している。「陰冷の冬、中越館の空洞の部屋で、私は翻訳の初稿を担当し、魯迅は初稿を直して謄写する。疲労や寒冷などちっとも感じなかった。二人で興味津々話したり笑ったりしながら、作品の物語を談論した。…」。周氏兄弟は合作の効果をかなり挙げた。相次いで、『紅星奔沖』（英国？著）、『盜世』（ロシア？著）、『ハンガリー騎士録』（ハンガリー？著）、『炭画』（ポーランド？著）、『黄薔薇』（ハンガリー？著）等多種の著作を翻訳した。やく三四十万字もあった。勿論全てロシアや圧迫された民族の文学だった。だが、兄弟合作の里程碑にしたのは1909年2月、6月に出版された『域外小説集』の一、二冊だった。その二冊は印刷も装丁も相当洗練された、表紙は毛織物に似たような手触りの厚紙で、青い羅紗紙だった。上にドイツの図案画が写ってある、ギリシア古装を着た女性は琴を弾いている、背景は光芒がきらめいた朝日のなかを、一匹の鳥が高い空を飛んでいる。題字は陳師曾が『説文』によって書いた篆刻なのだ。本の本文も上質な洋紙で、装丁は下だけ切って、横側は切らないでいた。でも定価がとても安かった。「小銀円二角」と明記している。巻首には序言が一篇あった、「異域文術新宗、自此始入華土」と断言した、気概が大きい。その出自は勿論魯迅の手筆からなのだ。全書二十七篇の中、周作人の翻訳は約三分の二を占めた。？、？、？などの英、米、仏の作家のほかに、主にロシア及び北欧、東欧などの弱小な民族の作家で、？、？、？

1920年3月に、『域外小説集』の新版の時、魯迅は序言で、「われわれは日本に留学した時、一種茫漠な希望があった、文藝が性情を転移できる、社会を改造できると思っていたのだ。この考えなので、自然に中国に外国の新文学を紹介することを思いついた。」といている。それは大抵周作人の意思も代表した。だが、ただ大抵といえるだけで、周氏兄弟が合作中尚ある差異が存在していたのだから。周作人の思い出によりますと「伍舎に魯迅と二人で住んでいて、私は昼間六畳間の部屋の中に引き込まれて、とてもくしゃくしゃして、仕事したくないから、魯迅と衝突したことがある。彼はいつも翻訳のことで私を催

促するばかりだったが、私はただ沈黙的消極的に対応した。或る日彼はいきなり憤激して、拳を振るって私の頭を叩いた。許寿裳がかけてきて、私たちをなだめた。」といった。おそらく簡単に周氏兄弟の衝突を彼らが性情が違うから起こったことにすることができないだろう、魯迅の性急でも、周作人の呑気でも。魯迅が嘗て翻訳を Prometheus（ギリシアの神話の英雄で天上の火を人間に与えた。）が「火を盗む」ようなことに喩えた。彼がそれを厳粛な事業と視し、自分の命も含めたすべてをその事業に投じたのだ。国家、民族、社会から学術、文学そのものに至ままでに對する強烈な責任感、使命感は彼に頻りに周作人を催促させただけでなく、更に鞭で無情に自分を叩き、督促した。結局、他人も自分も苦しませた。周作人は魯迅が毎晩油ランプの下で夜更かしまで読書したり、書いたりする事について、「魯迅がいつ寝たかは他の人はあまり知らなかった。大抵みなもう先に寝たからだ。翌日の朝になって、大家さんは油ランプを取りに来て、炭盆を整理したとき其の中には煙草の吸殻がぎっしり差し込んでいた、まるで大きな蜂の巣のようだった。それを見ると相当遅くまで勉強したのが大体分かった。」と思いついている。ここで人に描いてみせたのはまさに寝ることも食事も忘れた献身者の姿だった。周作人にすれば、彼もある程度積極的に翻訳の社会効果を求めるのは否認しないかもしれないが、彼にとっては多くは自分の興味でやることなのだ、興に乗って仕事する態度で翻訳に従事する。だから厳粛や真面目ができなく、ただ自然に任せ、自在に消閑な生活を過ごしたいだけだ。どんな外在のもの一たとえ翻訳のような価値のある思想文化活動でも自分を束縛させたくない。多分これこそ周作人が魯迅からの逼迫で常にくしゃくしゃと感じて、つい消極的に仕事を怠けるに至ったもっとも根本的な原因にある。

それにしても、周作人は性格が温順で、穏やかなので、たまに反抗しても、なお兄に服従して自分の活動を魯迅が従事している啓蒙事業の中に納めた。一一せめて（少なくとも？）、日本にいた時期はそうだったのだ。

### 三、初めて才を試みる

それで、また周氏兄弟が『河南』といった雑誌での協同作戦があった。

だいたい1907年から1908年の間に、魯迅と周作人は『天義報』、『河南』を陣地にし、相次いで文章を発表した。中では、魯迅の『人之歴史』(1907年12月『河南』1号)、『摩羅詩力説』(1908年2月3日『河南』2、3号)、『文化偏至論』(1908年8月『河南』7号)、周作人の『論ロシア革命と虚無主義之別』(1907年11月『天義報』11、12号合巻)、『論文章之意義及其使命因及中国近時論文之失』(1908年5月6日『河南』5、6号)、『哀弦篇』(1908年『河南』9号)等があった。当時には、大きな社会反響を引き起こせなかったが、中国現代思想史と文学史上の重要文献なのだ。それは目的も計画もあった力量を示す集団行動だった(魯迅の親友の許寿裳も協力して『河南』に『興国精神之史曜』といった文章を発表した。魯迅の提議で「旒其」と署名した。ロシア語の「人」という意味だ)と言わべきだ。周作人はこれらの文章を『新生』の甲編と称したのはとても道理がある。

それより、重要なのは周氏兄弟はとうとう中国現代思想文化領域で自分の独立の声を出したのだ。――その前は彼らが嚴復、梁啓超、章太炎などの学者の学生にほかならなかった。

勿論、中心意識は尚魯迅なのだ。魯迅の「立人」思想は一本の赤線のようにこの時期にいた魯迅、周作人(及び許寿裳)の文章を貫いた。周作人は彼の『読書雑拾(二)』の中で魯迅の『文化偏至論』と呼応しあって、批判の鋒を「物質を重んずる、精神を軽んずる」といった傾向に向けた。「中国では近來人がよく学を言うが、但し実際の物質に向かつて競い進んで、あらゆる物事は私用厚生に早く効果が上がるものでなければ、一切しないで廃棄する。……明達な士は物質的にも精神的にも豊かな人があるにも関わらず、なお文章を小道(旧時、儒学以外の学問)に軽蔑する。その故彼らもまだ惑っている。」。「我が中国をよく見れば、実業工商に勤勉に勤め励む者が圧倒的に多い。私は密かに寒心に堪えない思いをした。」。『哀弦篇』の中で、周作人はまた魯迅の『摩羅詩力説』、『文化偏至論』と同じ立場に立って、先覚者の現われるのを呼びかけた。「詩人というのは国の先知で、予言を以て民衆を教え導くことだ。民衆はそれを聴いて……その故、民は詩人を導師にし、詩人も民を自分と一体にする。群と自分の間は阻隔がない、??」。周作人は『論文章之意義及其使命因及中国近時論文之失』といった煌々大作で更にこの時期の魯迅と自分自身の文芸観を系統化して、「民族の靈魂を改造する」のを中心にした文芸思想体系を提出した、「文章というものは国民精神が寄ることなのだ。」と「??国民精神が美と広に進むのは未来の翼なの

だ。」と強調している。それは顯然魯迅の「立人」思想を具体化した。そして、周作人はそれで引きだした孔孟儒学を中心にした封建伝統文化に対する批判は特に注意すべきだ。周作人は『論文章之意義及其使命因及中国近時論文之失』の中で、「孔子が儒学を宗にし、??」と指摘して、文章改革と思想解放を大いに疾呼した。「??」といったのは反封建の根本的な方向で自然に魯迅と一致した。その激烈の程度が魯迅を超えたといってもいい。それから見れば、この時期の周作人は実際の政治活動と一定の距離を保ったにもかかわらず、なお徹底的な民主主義者、急進的な思想家の品格を保留していた。このような思想と政治実践を分離する傾向は殆ど以後の周作人が中国思想文化界において演じた役目を決めたのだ。

魯迅、周作人が文章を発表する陣地——『天義報』でも、『河南』でも無政府主義傾向があった刊行物なのだ。この事実はわれわれを当時の日本留学生界から日本思想界に至って、無政府主義思潮に広く影響されたのに注意させた。それに関する資料によりますと、20世紀初期、結成したばかりの日本初の社会主義政党——社会民主党の党内で片山潜、田添鉄二初めの議会政策派と幸徳秋が代表した無政府主義派によって、論争を行われたことがある。周作人は日本に came 時、革命運動をした友達の孫竹丹に頼まれて、お土産として、黄砂の茶壺を一つと羊皮のベストを一枚持って、宮崎寅蔵に届けたことがあった。魯迅もそれで宮崎と二回会ったことがある。中の一回は日本社会主義者によって作った平民新聞社の社内でも面会した、そして『社会主義研究』を買った。周作人は「当時通称された社会主義の共産主義の経典はマルクスの『資本論』だった。経済を立脚点にしたので、一般の青年学生はみな分かりにくいと感じていた。却って、余り科学的ではなく、空想のほうが多い無政府共産主義は比較的吸引力があったのだ。だから、幸徳秋水と大杉栄は勢力が学生の中で堺枯川より広い。」といている。中国の留学生の中でも無政府主義思潮もかなり吸引力があった。中国知識人思想発展の歩みから見れば、無政府主義がしばしばとても重要な橋のような役割を果たした、知識人が新思潮を受ける発端になった。或いは、各種の新思潮が続々と来る時、知識人にとって、最も誘惑力のあるのはやはり無政府主義なのだ。魯迅と周作人も例外ではない。1907年1月に、周作人は魯迅の命令を奉じて、『天義報』に『論ロシア革命と虚無主義之別』といった文章を発表し、虚無主義（つまり無政府主義）に弁護した。その中で「虚無主義を恐怖手段と混同するのは大誤りだ。」と指摘し

た。そのために、周作人は虚無主義（無政府主義）という言葉の出所を調べた。「初めては？の名著『父と子』に出てきた。その後遂通行の言葉になって、論者はそれを自号とするが、政府はそれを反逆者と指す。」。周作人は「虚無主義は純に誠実を求める学であり、根元が唯物論宗で、哲学の一分野になっている。去偽振弊、その効果があまねく行き渡っている。」や「ロシアは世事（？）以来、家庭専制が極めて強い、大体長く奴制に従ったから。その悪習の根が取り除けないほど深く定着した。虚無主義が突っ込んで、それを全て破った。」と強調した。ここでは、周作人と魯迅は顕然無政府主義（虚無主義）を反封建専制主義の思想武器として理解し、接受した。

人はよく無政府主義を鉄板一枚のように想いがちで、無政府主義の派別間の差異を無視する。それは正しくない。無政府主義の発祥地と思われる欧州本土では、無政府主義は前後三つの派別に分かれた。一は Stivnev と Pvoidlon の無政府個人主義、一つは Bakanne の無政府公団主義、もう一つは Kvopinine の無政府共産主義。本世紀初期、中国留日学生の中で最も影響があったのは無政府個人主義と無政府共産主義だった。著名な早期無政府主義者の劉師培はこういったように明確に区別している。「無政府主義はわれわれに確認されたが、個人無政府主義と違い、共産、社会の二主義両方から取り入れたのだ。ただし、彼らが宣伝した無政府主義は人類を完全な自由に回復させるに對して、私が主張する無政府主義は人類の完全な平等を実現することも兼ねる。蓋し人々は皆平等であれば、当然みな自由になる。でも、社会主義が重んじる財産だけの平等と違い、縦楽学派が主張したように心ゆくまで楽しむ個人の自由も実現する。」といった。

面白いことに、周氏兄弟は無政府主義の二つの派別に對して、それぞれ違った傾向性的選択をしたのだ。

魯迅は疑いもなく Stivnev の無政府個人主義に傾いた。彼は『文化偏至論』のなかで、Stivnev とニーチェのことを「精神と思考が最新（最高？）に達した学者」、「先覚で戦いが上手い士」と熱烈に賛頌した。彼は「ドイツ人の Stivnev はまず極端な個人主義で世に現れた、真の進歩が自己の足元にあると語っている。……自由が力から得る、力が個人にある、資財でもあり、権利でもある。その故にもし外力を被るなら、無間が寡人から出るか、それとも衆庶からでるか、みな専制なのだ」といっている。魯迅は同時に「天下の人を一致に帰させ、社会の中で、尊卑を一切なくす」といった社会平等観を鋭く批評した。

その結果は必ず「??」と思っている。魯迅思想の重心が個人の自由意志を強調するにあつたのがはっきり見える。それは Stivnev の「唯一者」——つまり「私以外の他からの何の権利」も、たとえ上帝、国家、自然、人、神権、人権などからの認めないと言った思想と強烈な共鳴を持っているのだ。

だが、周作人は Kropotkin に傾いた。この時期周作人は Kropotkin の『シベリア紀行』(1908年10月10日出版の『民報』二十四号)を翻訳した。彼が『天義報』に発表した『論ロシア革命と虚無主義』のなかで Kropotkin の『一つの革命家庭の自叙伝』からたぐさんの材料を引用した。このように周作人はいち早く Kropotkin の理論を中国に伝え、た伝播者の一人になった。後で周作人はこの時期の思想をまとめたとき、自分に一番影響があつた思想家と文学家を列挙した、まずあげたのはまさに「旧公爵でありながら無政府主義を信じる」

Kropotkin なのだ。彼は「Kropotkin の著作は私は『パンの獲得』等を読んだことがある。また『在英仏獄中』から『シベリア紀行』を選んで翻訳して、『民報』第24期に載せた。……私は一番好きなのはやはり他の二本、つまり『一人の革命者の自叙』と『ドイツ文学の理想と事実』なのだ。」と言っている。Kropotkin は人の本能が互助的、性善的だと強調し、また互助進化的な観点から、無政府共産主義社会を作るのを鼓吹した。彼の中国信徒は「無政府は私産制度を剷滅して、共産主義を実行する。人々はそれぞれの能力を尽くし、それぞれの所需要を取る。貧富の階級差がなくなる、金銭の競争が自然に絶つ。その時生活平等、工作自由、争奪の社会は協力友愛社会に一変する。」と公開宣揚した。このような「社会協力友愛」といった主張は濃厚な空想社会主義色彩がある理論で、穏やかな個性を持った周作人とはすぐに一致した。周作人は彼の文章の中で Stivnev に関しては一切言及しない、そして「演劇式なものが好きではない」、ニーチェの「その格調と文章は私の好みにあまり合わないのだ」と表示した。周作人の不満はおそらく「格調と文章」だけではない。ニーチェ(及び彼と類似の Stivnev) 思想の中で個人主観意志に対する極端な強調、「剛愎主義」、「一極に偏る」のを惜しまない、それらは当然「庶得中庸」の周作人の好みと合わない。魯迅は『文化偏至論』の中で「明哲の士(当時ニーチェ、Stivnev の人々を指す)……?」と言っている。その論断と反対、周作人がこの時期書いた文章のなかでは繰り返して強調したのはまさに人の物質と精神、情と理の「協調」、全面的な発展、所

謂「人生之始、首在求生、衣服飲食居处之需、為生活所必取。」、「適文明漸進、養生既全」、「而神明之地？竟不足、則美術興焉」などだった。追求するのはまさに一切偏執のない調和の取れた生存方式なのだ。これは Kropotkin の「協力友愛」と精神的にお互いに通じあう。さらに周作人が五四時期提唱した新しき村運動の前触れだと思われても（されても）良い。

#### 四、師友の間

当時東京では実際に魯迅を中心とした文人グループが既にできた。最初は 1907 年 11 月に、魯迅の革命友達の陶望潮によって発起したのだ。周氏兄弟と許寿裳、陳子英、汪公權などと一緒に参加して、ロシア語を勉強した。それを一回の団体行動といっても良い。教員は革命に参加したため日本に亡命した？といったロシア女性だった。学生は殆ど革命に傾き、学習目的もとても明確だった。周作人が言ったように、「我々はロシア語を習ったのはその自由を求める革命精神及び文学を敬服するからなのだ」。だから、今度の学習は政治色彩が大変濃厚だった。そこから見れば、周作人はその中の積極的な推進者ではなく、ただ集団行動に従っただけだ。だから、結局ロシア語教室は途中で夭折したため、ロシア語の勉強も途中で放棄させられたことは周作人にとってどうでも良いような気がした。後でこのことを話した時も、彼は「解散して済んだ」と淡々言った。

本当に周作人の興味を引き起こして、彼に影響を与えたのはやはり翌年の（1908 年）夏、みんなで民報社で章太炎先生の講義を聞いた時のだ。

周作人は南京で勉強していた期間で、『蘇報』事件で章太炎に欽慕の情が湧いた。でも、彼は当時おもにまだ梁啓超、嚴復の学生だった。周作人の思い出によると、東京に来た最初はみな尚とても嚴復を重んじたが、「ずっと後になって……『民報』に載せた章太炎先生の文章を読んで、その文章に嚴復の訳文を「載飛載鳴（飛びながら鳴る）」で八股文の文風（つまり形式的なもの、必要以上に華麗な詞藻が多い）から抜けていないと指摘している。それを読んで、はたと思いついて大いに悟って、嚴復のことをあまり感心しなくなった。」。これは周作人が梁、嚴から章太炎に転向し始めた発端なのだ。

事实上、日本にいた時期の魯迅、周作人が章太炎の強大な影響下にいた。「重個人、張精神（個人を重んずる、精神を主張する）」思想の形成も、無政府主義（虚無主義）思潮に対する関心注目も、多少、あからさまに或いは密かに章太炎から啓示を受けたことがある。周作人の話によりますと、彼が『民報』二十一期に発表した？の小説『一文銭』は章太炎先生が親筆で直してくださいったものだという。そうすれば、民報社で講義を聴く前は周作人は既に章太炎と知り合った。紹介人は周作人と魯迅の下宿の中越館（伍舎）によく尋ねてきた常客で章太炎の婿でもある巖未生のはずだ。周作人の話によると、太炎先生は巖未生を通じて、周作人にドイツ人 Dausen の『心哲学論』の英訳本に拠ってインドの奥義書を翻訳する依頼があった、周作人は直接？を翻訳して、彼が口頭通訳し、太炎先生がそれを筆述するとアドバイスした。先生も欣然賛同したが、残念ながら、後の遷延でなかなか実現できなかった。周作人は太炎先生との合作機会を失って、終生の遺憾事だと思っているのだ。

でも、やつと先生の教えを拝聴する機会がやってきた。魯迅によって発起した。当時章太炎は東京で同盟会の機関報『民報』を主持しながら、国学講習班を作った。神田の大成中学の講堂を借りて、定期的に講説したので、留学生界ではとても影響があった。魯迅と許寿裳は巖未生に章先生の講義を聴きたいが、講習班は人が多くて、雑踏しすぎるおそれがあると話した。巖未生は直ちに太炎先生と相談して、毎週日曜日午前民報社でもう一つの班を開くことを先生も欣然引き受けた。講義を受けたのは「伍舎」の周氏兄弟、許寿裳、銭家治のほか、勿論巖未生も入った。またはそれを聞いて参加にかけてきたのは銭夏（後は名前を玄同に改めた。）、朱希祖、朱宗萊の三人で、あわせて八人になった。民報社が小石川区新小川町にあって、八畳間の部屋の真ん中に低い机があった。先生はその前に座って、学生は三面に先生を囲んで、講義を受けた。使った本は『説文解字』だった。一字一字説明していった、旧説を引用したり、新義を發揮したりした。文字学は本来（もともと？）とてもつまらないが、太炎先生が語ると、なかなかおもしろくなった。例えば、「鬼」という字について、先生は鬼頭が即ち死人の頭顱だと言って、学生の中ですぐ「ム」という字がバラバラの骨みたいと附会（こじつける？）する人はいたが、先生も反対しない。後に先生の解説をよく考えてみたら、その言い方が道理がある。昔は鬼の觀念が具体的にだった、後世に言った魂や気と違う、だから多分最初は確かに死人或いは枯骨だった。

鬼の字の形も構造もそれに十分あたる。各民族の原始図画の中でもよく骸骨で死神を代表することは先生の言い方を傍証できるのだ。??章太炎先生が怒りやすいそうだが、それはただお金持ちや官僚等に対することだけだ。青年学生に対してとても優しい、家族や友達のように皆と自由に談笑したりした。夏、畳に正座して、ランニングシャツだけ着て、泥鯊髭を生やして、にこにこして皆さんに講説した。きりっとしたところもありユーモラスでもある。まるでお寺の弥勒菩薩のように見える。講義の中間休憩に太炎先生がよく世間話をしたり、時にも巧みな理論も言ってみなをビックリさせた。ある日突然弟子たちに彼が法律に対する意見を話した。彼の話によって、旧刑律は窃盗罪に対する判決は盗んだ物の多少を基準にした。それはとても不公平だった。ただ金持ちの利益のために配慮しただけで、道理にも通じない。だから彼が窃盗事件の被害者の財産との比例で決めるべきだと主張した。例えば、被害者は百元しかない、五十元盗まれたら、損失は50%になるに対して、百万以上の家財で、一万元盗まれてもただの1%の損失になる。五十元盗んだのと比べれば罪がずっと軽いだろう。弟子たちはその話を聞いて、道理があると思ったが、本当にそれでよく通れるかどうかは知らない、皆法政学の専攻ではないから、賛成するわけもない。ただ一応聴いておくだけ――先生のほうからの本意も一応伝えるだけで、真疑は保証の限りではない。先生は又常に人から講説だけ頼まれるのに不満を表す。何回も真面目に弟子達にあなた達が私のことをよく知らないで、私の長所は政治を談論するにあると言っている。弟子たちは彼の政治関係の著作、特に『民報』に発表した文章を熱心に読んだことがある、なんの反対もなかったが、心の中でやはり先生の偉大は第一は反満清政府、其の二は学問があると思っている。かれは多大な政治才能があるのが実に見えない。

先生はとても民主的だ。講義、閑談の時、よく学生達に意見を發表させた。最も発言が好きなのは勿論錢玄同だった。彼はよく先生の前で、「話箱」を開くと（これは後に同窓達が彼に送った渾名で、彼がよく早口でいっばいしゃべりの意味）、止まらなくなる。しかも手まね足まねをして、まるで畳みの上を這い回るようだった。魯迅と許寿裳はその様子を見て「這来這去」と言った。後で、錢玄同は時にみんなもう帰ってしまったも自分はまだ帰らないで、太炎先生と談論した。よる遅くまで話し合ったら、『民報』社にとまって、談論を続けたと言った。何を談論したかは、文字復古の方法などにすぎない。太炎先生と錢玄同は二人とも物の名前と形??、あらゆる字に必ず其の「本字（ある漢字のもとになった漢

字」を求める、そして最も正確な字体でそれを書き表すべきだと主張している。これはなかなかの難題なのだ。当時まだ甲骨文を発見していなかったし、鐘文は太炎先生が信じる文字ではないからだ。最後に太炎先生は小篆を使う方法をアドバイスしたが、これも問題がある、『説文』の中に小篆の字の数が少なすぎる、または自分で勝手に偏旁を組み合わせて作るわけにも行かない。後に苦心研究を積み重ねて、錢玄同はやつと「小篆精写」を作った、「その中は尚補っていない脱字も正していない誤字もある」。章太炎先生も楷體篆書の『小学答問』を一冊、『新出三体石経考』（『章氏從書』続編に収録）を一冊作った。太炎先生は特別親筆で「吳興錢夏、前は私が書いた『小学答問』で、字体は正篆に附属、裁別取捨が極めて厳格で、張力臣が書いた『音学五書』より上だ。」という跋文を書いた、――ただ、これはもう三十年後のことだった。

『説文解字』の次は『莊子』も講説したが、周作人はあまり記憶がない、多分彼は『説文』だけ聴いた、後は行かなかったかもしれない。周作人は晩年になってこのことを話したとき、それほど遺憾ではなかった。彼は「其の『莊子』の講義は後ほど一部整理し、『斎物論釈』といった本にした。それは先生の広博な仏学知識で説明したのだ、佛教の圓通（佛教で悟道徹底する）部門に属する。とても敬服しますが、私はそれに対してあまり興味が無いから、『莊子』の講義を聴いていなかったことに残念でも後悔でも思わない。むしろ『説文解字』を聴いて、得た中国文字の知識のほうが、実にとっても私の役に立ったので、大変感謝しています。」と言っている。もっと深く言えば、周作人に深刻な影響を与えたのはやはり太炎先生の講説の中に滲透した復古精神なのだ。周作人は錢玄同或いは巖未生から太炎先生のこういうことを聴いた。太炎先生は東京にいたとき、毎朝外から納豆の呼び売り声が聞こえたときよく弟子たちに「これは何を売っているか。nato、natto って、こんなに凄凉に感じさせる。」。このことは周作人に深い印象を残した。後、周作人はこの納豆の呼び売りは北京の夜更けの寒夜菓子饅頭を売る呼び声ととても似ている。そして、その凄凉な呼び声は最も亡国の恨を抱いた遊子の共鳴を引き起こせると言った。周作人はまた錢玄同の兄錢念劬と夏穂卿先生は東京の街を歩いていたとき、店舗の看板の句と字体を見るとよくそれを指さしながら、尚唐代の遺風が残っていてよかった、却って今の中国で見える物ではないと慨嘆した。周作人本人も同じような体験があった。中国の留学生は日本での日常生活の中に自己民族が既に失った古風はなお存在しているのに気がつくこと古事に

対する幽思を起こされないわけにはいかないだろう。このように復古情緒と民族主義思潮は交わって、ほとんど当時日本の中国留学生界を支配した。1903年に『浙江潮』といった新聞に既に「今日は民族主義が発達している時代だ、中国はその真つ先に立つべきだ。だから、今日こそ我が中国で民族主義を提唱しなければ、我が国が本当に滅亡する。」と呼びかける文章を発表した人がいた。周作人も自分のことを『新民從報』、『民報』、『革命軍』、『新広東』のような新聞を読んで、排満（及び復古）、民族主義者に一変して、十年以上も続けた。」と言っている。民族主義は当時二重の意義があった。対外は帝国主義の侵略と奴役を反対して、対内は清朝が漢族と他の民族に対する圧迫と統治及びそれが実施した「寧贈友邦、不与家奴」の売国主義政策を反対する。それで、「外抗列強」と「内覆清廷」は当時民族主義の兩大スローガンになった。まさに「反清」の旗印を掲げたことで、若干の漢族知識人は「漢族統治正統を恢復する」幻想を抱いた。章太炎はこういう背景で「光復（復興の意）」のスローガンを提唱した。「私の所謂革命者は革命ではなく、光復といい、中国の種族を光復することだ。」。1906年に章太炎は出獄後、訪日に来た時、また更に「国粹」、「激励種性」、「増進愛国熱情」を以て呼びかけた。自ら国学講習会を主持し、「復古」即ち漢族伝統文化の恢復を反満清政府統治の思想武器にした。これは当時の愛国留学生から見れば、道理に適った当たり前のことだった。後で周作人は「私はその時民族革命の一信者であり、民族主義である限り、必ず復古思想を抱く。我々は清朝を反対し、清朝以前或いは元朝（モンゴル）以前の王朝はみな大抵よかったと思った。……」と思い出した。章太炎の直接的な教誨を受けて、周作人は一時期で各種の復古試験にとても夢中になった。十年後、彼は『私の復古の経験』といったタイトルの文章に、当年の種々の努力をこう振り返った。――

最初敵復、林琴南の訳本を読んだとき、このように  
諸子（諸子百家）の文で夷人の話を書く方法が非常に  
正当だと思って、できる限りまねた……後ほど太炎先  
生の教誨を聞いて、更に一歩進んだ、「載飛載鳴」の調  
子を改めて、たくさん古字に換えた（例えば駟を？  
に換え、耶を邪に換え）。――この努力のおかげで、  
『域外小説集』の原版は二十冊しか売れなかった。こ

れは私の復古の第一本の道。

『新約』は中国で文理と官話の二種類訳本がある。官話の訳本は言うまでもない、文理の訳本でも満足に思えなかった、文章は「古」が足りなく、周、秦の諸子と佛經の古雅に及ばないから。それで私は「越俎」で改訳しようと決意した。そして三年以上をかけて、この仕事のためにいろいろと予備した。ギリシア語を習ったりして、まず『四福音書』と『イソップ寓話』を翻訳する予定だった、この時林琴南さんの『イソップ寓話』があまりにも古いと思ったからだ。――後になって、聖書の白話文訳本はもう十分良い、文理の訳本もいい、それ以上改訳の必要なんかはないと思った。それは後の話。以上は私の復古の大二本の道。

以前私は古文を作ると、一句一圈の点句法を使った。あとで、ギリシア古人は皆一本の文章で、句点も段落も付けないのを思いついて、とても古朴で、真似てもいいだと思った。中国の文章の作り方はまさにそうであり、それと暗合したと言える。圈点句の方法は殊に古雅が足りない。……だから私は圈点の方法を取り消し、一本の文章は必ず最後まで一段落でなければならぬ（尚徹底的に古法に従えない題目があっても）と主張した。……これは私の復古の第三本の道。

そして、このような復古精神は周作人個人だけ特有のものではなく、大抵同時代同職業の人は多くこの傾向があった。章太炎『説文』教室の学生錢玄同は辛亥革命前後になって、まだ故郷の浙江で『深衣冠服説』を書いていた、古深衣（中国古代、士大夫が朝廷で平常着用した制服。衣と裳とをつなげて仕立てたもの。）の制度を考究し、その上、自ら実行した。ある日、自分で作った「深衣」を着て、「玄冠」を被って、「大帯び」を締めて事務所に行った。友達に大笑われた、それから笑い種になった。周作人一代の人たちが若い

頃の復古試験は後来者の目で観れば、思わず可笑しいと感じてしまったが、当時は本当にとても真面目にやって、それに大変徹底的にやった、言行一致と言える。周作人自己の話では、「我々のような復古はかなり時間も精力も費やしたが、それで極大な利益も得たのだ。それは「此路不通（此の道は通じない）」という教訓なのだ」。それにしても、その執着な理想主義の追求は人に追懐させないわけには行けない。

多分民報社で講義を受けたのをきっかけに周氏兄弟、許寿裳らは太炎先生との間に友達のような信頼関係を築いた。1908年、章太炎は困った事があった。――日本当局は『民報』社が官庁に人事異動の届けを出していないのを口実に、会社を封鎖し、社長の章太炎に罰金五十元の判決を言い渡した。そしてもし期限内罰金を出さなければ、懲役に改めることになった。期限の最後の日になったが、罰金はまだまだ当てが付かない。その晩巖未生が魯迅、周作人等の下宿の伍舎へ助けを求めに来たが、みな貧乏な国費留学生なので、ただお互いに顔を見合わせて、仕方なかった（どうしようもできなかつた？）。結局、許寿裳は湖北からの留学生陳さんが張之洞（清末の洋務派政治家。湖広総督、軍機大臣などを務めた。）に国文会の『支那經濟全書』を翻訳していたが、卒業したときまだ未完成なので、彼に翻訳を続けてもらったため、通帳にお金を二三百元振り込んだことを思いついた。老夫子の急を助ける（救う？）ために、暫時そのお金を借りる（移用する）より外しかたがなかった。太炎先生はやつと懲役を免れることになった。皆さんも先生のためになって、喜びと安堵を感じた。

周作人は最も忘れられないのはやはり太炎先生について梵語を習うことなのだ。1909年春夏の間に、巖未生は突然太炎先生の手紙を持って来た。手紙は篆文で書いたのだ。内容は次のようになっている。

豫才、啓明兄鑑：数日未晤、梵師密史羅が已に来た。

十六日午前十時に開講の予定で、受講人数が多くない。

二君の光臨を待望しておる。此の半月の学費は弟が已に

二君の代わりに支払ったから、焦らなくて良い。手書。

即頌撰祉。

麟頓 首 十四

太炎先生はこんなに切なる態度と誠意を持っていて、周氏兄弟は一時は何を言えばいい

かは分からなくなった。十六日の午前になって、周作人は約束通り予定の開講場所——智度寺に行った。先生も即刻来た。学生は太炎先生と周作人の二人しかいなかった。教師は洋紙に単語を画いてから、発音を教えた。章太炎と周作人は一々真似て書きながら、発音の練習をした。しかし、字形が覚えづらいし、発音も難しいし、字数が多くなっても、ちよつとはつきり分からないような気がした。昼十二時になって、休みの時間で、教師は外の紙に梵語を一行書いて、英語で「私は彼に梵語の名前を書いた。」と説明した。太炎先生を見ながら、「披遏耳羌」と読みました。太炎先生と周作人は茫然と見合わせた。教師はまたもう一回繰り返して、今度周作人はやつと頓悟して、慌てて「彼の名前は章炳麟です、披遏耳羌ではありません」と言ったが、教師は英文の読み方に聞き慣れたせいなのか、それが間違いないと思っっているようだった。いくら解釈してもよく分かってくれないので、やむを得ずそのままで済んだ。周作人の話では、此の「一師二徒」の梵語教室には彼が二回しか行かなかった。あまり難しすぎて、身に付けられない恐れもあると思ったから、中止した。

それは多分太炎先生の誠意に背いたかもしれないが、周作人はそのことを通じて、太炎先生に対して、更なる深い了解を持った。1936年に、太炎先生がなくなってから、半年以上も経って、周作人はようやく努力して追悼文を書いた。題名は『記太炎先生学梵語事』だった。文章の最後にはこう書いてある。――

太炎先生は朴学（漢学の意、中国で、宋、明の性理の学に対して漢・唐の訓詁の学。）大師でもあり、仏法研究も兼ね修めていた。また依自不依他を標準にした故に、法相宗と禅宗を推重して、浄土宗密宗の二宗だけは不取した。これは普通の信者と大違い……且つ、先生は佛教の出自がバラモン正宗だと認めただけではなく、……また吠壇多奥義書を翻訳しようとして、中年になってから、外道を師にするにもかかわらず、梵語を習った。このような博大精進の精神は実に凡人が及ばないものだ。後学者の模範とするに十分足る。私は太炎先生の学問と思想について

その百分の一すら知らないが、その偉大な気象が少し分かった。これだけでも大変私の役に立った。

それは周作人の中の章太炎なのだ。「依自不依他」といった思想の独立自主性を堅持しながら、それとも各流派を受容する。「外道を師にするにもかかわらず」、儼然とした博大精進の大師気象なのだ。

これはまさに：脚不能至、心向往之。(そこまでは至らないが、心の中でそれに憧れる)

## 五、婚後

大体 1909 年 8 月、周作人は羽太信子と結婚した。周作人の終身大事については残念ながら我々はただ鄭重にその言葉を使えるだけだ。自分のことを談論するのが好きな周作人は自己の婚姻については却って一字も残していなかった。我々も勝手に憶測しにくいから、一応それに触れないことにするしかない。

われわれは知っているのは周作人が結婚してから、しばらくして、魯迅が帰国して、杭州で先生を務めた。魯迅は嘗て自分より先に帰国した許寿裳に「あなたは帰国してよかった。私も帰国するしかない、作人が結婚したら、費用が前より多く増えるから、私は仕事を探さなければ行けない。そうすると彼にいくらか助けることができるのだ。」と言ったそうだ。

魯迅がいたとき、周作人は何もかも兄に頼った、一切の対外交渉は全部魯迅に任せた。彼は何も言わなくてもすべて済んだ。今、魯迅はいないで、何でも自分でしなければならぬ。そして、いち早くすべきことは日本語を覚えるのだ——当然、教科書に載せた日本語ではなく、「実際の社会で流動している言葉」のだ。

そして、日本語そのものも変化している。最初の何年間、日本語はまだ比較的に分かりやすかった。既に梁啓超が提唱した「和文漢読法」の時代ではないが、日本語の漢字はまだ多かつたし、制限もあまりなかった。中国人は勉強したらよく努力は半分で倍の効果があると感じた。あとはだんだん変わってきて、漢字は減って行って、仮名は増えてきた。もう「眼で学べる」文ではなくなつた。耳で聞かなければならない話になつた。

「実社会で流動している言葉」はどこに存在するのか。道理から言えば、現代の小説か戯曲を読んだほうが一番いい。でも、それは範囲がとて広くて、どこから着手すればいいかは分からない。それで周作人は民間の世俗文学に入って、「活」の日本語を覚える方法を探すのを決心した。ちょうど周作人が下宿した本郷西片町の突き当たりであった鈴木亭は正に日本で「寄席」と呼ばれる興行場だった。暇の時、「寄席」へ「落語」を聞きに行くのは周作人の一種娯楽になった。一応学校に行くにあたると言ってもいいだろう。「落語」は中国の単口相声のことなのだ。ただ中国で純粹の個人の消遣で、興行場ではこの出し物があるのを聞いたことがない。そして士大夫に見下されて、著録にも載っていない。日本の「落語」は最初は滑稽談を聞かせて、一座を娯楽させたが、後から道路の脇に場を設置し演技した、また定期的に舞台上で演じるに変わって、出演者は一人ではなく、故事もだんだん長くなってきた。日本の落語家は三遊亭と柳家などがある。周作人は柳家小さんが高座して、厳然とした村の塾師のように、徐々に陳述し、まるで『論語』を語っているみたいが、聞き手が思わず吹き出したのを見たことがある。もつと派手なものもある。それは黄公度の『日本国志』巻三十六『礼俗志三』に、はなしか（落語家の通称）は「手で扇子を弄びながら、笑ったり泣いたり、歌ったり酔ったりする。流し目に見て、しゃなりしゃなりとしなを作って、女の振りをする。田夫野人の話し振りを真似たり、声色を使ったりして、色々な可笑しい、あやしい振りをする。人情世態を表しつくす。その滑稽な話の末尾に落を付けて聴衆を興がらせるので、落語と言われるのだ。」と記載している。日本の関根黙庵の著作『江戸の落語』のなかで、「落語」の魅力についてこう描写している。「???」。

周作人にとって勿論別な意義があった、彼は気楽な娯楽の中で、日本語口語の表現力を楽しむこともできれば、世態人情のなかの日本文化の神韻を感悟することもできるのだ。

周作人を驚喜させたことがあった。それは彼が「落語」から日本民情と言語文化の中にあつた俳諧の趣を発見したのだ。それは中国でもとあつたのに、ほとんど道学先生らに摧き毀された。周作人から見れば、俳諧風趣足らずは人性（民性）が「不健全の一つの徴候」でもあり、「道学と八股が人心を把握した証拠でもある」。そこで彼は更に意欲的に日本文化の中の俳諧の趣を探したり調べたりしたら、また「川柳」と「狂言」を発見した。

「川柳」は近世の江戸時代に現われた、大体二百年あまりの歴史を持っている。「落語」の起源とほぼ同じ時代なのだ。「川柳」は前句づけから独立した一七字の日本諷刺短詩で、其

の特徴が「誹諧味及び文字の戯れを重んじる」。川柳趣味の半分は詩形にあり、もし意思だけ表現し、形式が欠けるとすれば、その特色がなくなる。周作人が川柳を選んで日本語を習ったのは賢明なのだ。周作人は「良い川柳は妙なところがすべて確実に情景の要点を掴むことにある。一切遠慮なく、それともとても含蓄に富む言葉を投げ出して、読者に微かに針に刺されたような感じをさせる。または少しわさびを食べたように、辛さで涙が流れてしまったが、あつという間に過ぎた。ピーマンのようなしつこい感じがしない。「川柳」は人情の機微をうがち、元々何か悪意があるわけではない、我々はそれに書いた世相を見て、思わず頭を頷きながら、微笑んでしまったのだ。でもそれらの人情の弱点を知っていたこそ、却って更に人間の可愛らしさを感じられたかもしれない」。よく顔を綻ばせて笑った後、また一種淡々の哀愁を感じる。それは所謂「情がある滑稽」だろう。「狂言」は日本中古の民間喜劇である。ちょうど中国明朝にあたった時代だ。「狂言」も「能楽」（その台本脚本はつまり謡曲だ）も中国の「散楽」（日本に伝わって「猿楽」と訛った。）をまねて作ったそうだ。また若干元曲の影響を受けた。「能楽」は悲劇が多いに對して、「狂言」は「猿楽」の中の比較的に軽快で俳諧の内容だけ取り入れ、よく、「能楽」を演じる時その二本の悲劇の間に演じる。そして当時の口語を使う場合が多い。「狂言」を見ると、周作人はよく故郷の目連戯を思い出して自然に親しい感じがした。「狂言」が表現した下層人民の価値、審美判断はいつも社会俗世の見解と反対なのは正に周作人が特別に興味を持ったものだ。彼は何本かの文章に、「狂言」の中で公侯が大体皆粗俗だ。——侯爺が花見に出かけて、詩を吟味しようとしたら、全部間違えた（『侯爺賞花』。「僧侶が大体墮落だ」——和尚たちが皆名僧からただの丸坊主になった、女色の戒めを犯して、弟子に告発されて、引っ込みがつかなくなった（『骨皮』等）。「鬼神も騙されたり、はめられたりする（？）」——蓬莱島の鬼が祭りで人間に来て、女に溺れ、宝物をすべてだまされた始末、豆子に追い出された（『立春』）。中国の伝説中恐ろしいほど凶狂な雷公まで「狂言」で滑稽で可笑しく見える。空中で失脚して落ちてしまって、腰骨が怪我して、庸医に注射してもらって、痛みでああと叫びながら、やっと天上に飛び上がった（『雷公』……と語った。「狂言」は滑稽の成分が多く入ったが、趣味が醇朴且つ淡泊で、俗悪に陥っていない。周作人はこういうような日本民間文学の壮健特質が最もすばらしいと思っている。それも彼が小さな頃から養った平民趣味とまさに合致した。

周作人は民間文学の滑稽趣味を楽しむことから、日本文人文学の中の「誹諧」に対する関心に転向した（移した）。彼はよく新版の雑誌を買って読んだり、古本屋で立ち読みしたりした。「誹諧」は謂わば「誹諧の連歌」の略称なのだ。和歌の上句と下句とに相当する五・七・五の長句と七・七の短句との唱和を基本とする詩歌、多人数または二人か単独で長、短句を交互に長く連ねていく。中にはよく誹諧の意が含まれた。後は一首の連歌では、発句だけでも即ち五・七・五の長句で独立な詩として成り立って、俳句となる。俳味のある簡潔な散文は俳文という。このように、誹諧の連歌、俳句、俳文は一種「誹諧体」となっている。実は、誹諧という名称の出所は中国なのだ。『史記滑稽列伝・索隱』に「滑稽は誹諧のことだと姚察が言う」と書いている。杜甫集に「遊びで誹諧体を二首作って、気分を晴らす」と言う言い方もある。誹諧体は詩歌でも、散文でも最大の特徴が「日常用語で俗事を描く」。周作人の言い方によりますと「自由駆使雅俗和漢語、雑糅中に調和が見える」。周作人の趣味は確かにまずその言語の特色にある。彼はかつて日本の俳句大師松尾芭蕉と謝澁村の作品や正岡子規、永井荷風、戸川秋骨、島崎藤村、文泉子、谷崎潤一郎などの俳文随筆の中で俳句禅趣を繰り返して体験、吟味して、それに陶醉して、自制できないほどだった。彼は思わず「文字がそんなに和平敦厚だが、清澈明浄で、脱離庸俗だが、新異に見えない。」、「飄逸ユーモアでも、その中に切なる深刻な思想と経験が含まれている。芭蕉、一茶から子規まで、皆そのようだ。」と書いてしまった。直感で彼は自分がここから日本文化の殿堂に入っていると思った。

周作人は「東京と明治時代に対して、私はかなりよしみがあるような気がした。だからそちらの人情物色を少し知りたかった。ひいては江戸と徳川幕府時代についても入りたかった。」それで、周作人は更に江戸徳川時代の浮世絵に惹かれた。周作人に初めて浮世絵を認識させたのは宮武外骨編集、雅俗文庫発行の雑誌『此花』なのだ。周作人の紹介によつては、宮武外骨が明治大正時代著述界の奇人だった。その発行物は挿絵が大抵木版画で、筆禍史、私刑類編纂、賭博史、猥褻風俗史などに及んだ。その中の『川柳語彙』はまさに周作人が川柳を習う入門書なのだ。宮武外骨が編集した『此花』は浮世絵を紹介する月刊の専門誌で、二年間発行していた、またたくさんの画集を編集した。見られたのは殆ど複製本でももう十分に周作人におもしろいと思わせた。浮世絵の多様な形式——線画、着色画、木版画などは周作人の童年時代の美しい思い出を甦らせた。当年彼は魯迅の影響下、

中国民間の切り紙、木刻芸術にも夢中になったことがある。現在周作人を惹いたのはこれらの浮世絵の画家が正統画派を離れ、芸術上に自ら一家を成し遂げたほか、画いたのが大衆的な風俗なのだ――背景は浮世で、人物は多くが女で、一部の俳優の似顔絵の外に殆ど遊里の遊女だ。だから浮世絵を見ると、吉原（東京の遊女の集まる場所）遊廓を連想しやすい。――周作人が陶醉した「落語」、「川柳」は吉原との関係も同じく密接だった。周作人は浮世絵の画面がとても華やかで、色彩もとても艶美だが、よく一抹の暗影が隠れているのに気づいた。この発見は周作人をまた誹諧の境に入らせたような気がした。而も、彼は何となくそれが中国伝統芸術と何か極めて似ているものが存在すると感じた。ずっと後になって、周作人は俳文大師永井荷風の『江戸芸術論』第一章論浮世絵之鑑賞を読む機会があつて、はたと思いついた。永井荷風がこう書いている。――

・・・・・・

永井荷風のその話は多分当年周作人をととても驚かせた、彼に終生忘れられない印象を残したので、よく自分の文章に引用された。晩年『知堂回想録』を書いた時も飽きないほど前後二遍書き写した。周作人はそういうようにする理由があるのだ、永井荷風が浮世絵の境地やムードに対する描述は高度に日本文化、中国文化、ひいては東方文化の精神をつかみだした（練りだした？精練した？）。そこで表現された人と人との関係、人と自然の関係、生命価値や人生意義に対する哲学的思考、寂寞の、幽玄の、凄寥の、夢如く、それとも内在の情熱が迸っているムード、及び泣、喜、酔、嘆、親、懐のような情感心緒は皆東方式なのだ。周作人は「東洋人の悲哀」で概括した。それは綿々無尽の歴史と現実の苦難の中を生き抜いている東方人が時世を憂える憂患意識及び無常、無告、無望の中で執着に追求する現世精神と韌性力量を表現している。周作人が「東洋人の悲哀」といった概念を考え出した際きつと言葉にならない（できない？）喜びを感じたに違いないだろう。というのは、彼の中で日本文化の整体面貌がしだいに明晰になってきた一方、中国文化、東方文化とのお互いの融合の中、また少し面貌が曖昧に見えた。此の明晰でもあり曖昧でもある図景こそ周作人が追求しているもののような気がする。

周作人は日本文化に対するこのような感覚、印象は彼が日本近代文学作品を読んだときまた更に強め、充実させた。周作人の話に拠りますと、彼が日本に来て伏見館の下宿に着いたところ、魯迅が少しずつ買い揃えた夏目漱石著作の単行本『我が輩は猫である』（上巻）、

『様虚集』及び『鶉籠』が目に入った。当時東京の『朝日新聞』に夏目漱石の『虞美人』は連載されていた。真つ先に読んで満足を得ようとするために、平日よく買って読んでいた学生紙『読売新聞』を『朝日新聞』に換えた。それは周作人が日本近代文学（つまり明治時代文学）に接触する発端なのだ。でもその時の周作人は普段読んでいた本はやはり英語の本のほうが多かった、日本近代文学にはまだあまり知らなかった。彼は興味を日本語言語の勉強に移した時、まず注意（関心を持った？）したのは尚夏目漱石の作品だった。赤羽橋のたもとの狭い二階家に隠れて、学校をサボって、密かに夏目の小説を読んでいた。彼が最も愛読したのはやはり『我が輩は猫である』と『坊ちゃん』だった。そして日本語を習う友達にもよく勧めた、それは夏目の早期代表作で、日本の学生生活及び社会を描写しているの、見識を上達させる（増やす？）ことができるからだ。今度再び読んで、周作人は夏目の小説は彼独自の特色があつて、或いは英国紳士のユーモアと江戸っ子の洒脱の和合わせるものといつていいと思つている。夏目は英文学を専攻し、和漢古典にも通じていて、また正岡子規と一緒に俳句と写生文を作り、それらを全部合わせて小説に用いたため、そういうような作風ができあがつたのだ。そして彼の文字と口振が何ともいえないようなほどよい気分を感じさせる。――それは口語から文学作品を読んでみようと思つていた周作人にとってちょうど都合の良いものだ。周作人は彼が夏目の本を読んで、「おもしろかったのは必ずしも内容とは限らなくて、時には文章に魅せられて、途中で止めるに忍びない気持ちになつてしまった。」と言つている。日本文学の中で、「夏目の外にこういうようなことはあまりないようで、後輩では志賀直哉にそんな気分がちよつとあるが、次は多分佐藤春夫だろう」という。周作人は嘗て夏目の『坊ちゃん』という書名の文字、口調及び翻訳を吟味したことがある。『坊ちゃん』の原題名は *Botchan* で、調べて見たら、本源は坊からなのだ、*bo* と読めば市街の意で、僧侶の住居でもあり、転じて僧侶、坊様。男の幼児を親しんで呼ぶ時も坊様といい、坊や、坊ちゃんともいう。坊ちゃんはつまり書の内容なのだ。だが坊ちゃんは幼児に対する親しみでもあり、またはある語に添えて嘲りの気持ちも含めた意でもある。中国では公子哥という語もあるが、坊ちゃんとぴったりする語はない、たいてい此の二つの語の通俗性がかなり違う。日本文字の精微なところに対する繰り返し味わいは周作人にとって一種の楽しみである。彼は夏目の文字を味わっているうちに日本語言語の余裕と美も感じれば（魯迅は『桃色の曇り』を翻訳する前の一言』

に「日本語は実に中国語よりもっと優婉」と言っている。)、夏目の小説にある独自の低徊趣味も会得する。――その中に同じく「東洋人の悲哀」が染込んでいる。

周作人は夏目漱石と同時代の作家の森鷗外に対して、その「文章の清淡且つ豊潤もまさに同じく超絶なのだ」と思っている。そして作品の中で示した「万事に対していつも遊戯の心理を持っている。」「理智の人の透明な虚無の思想」はさらに周作人の共鳴を引き起こした。

周作人は森鷗外の著作の中で、彼の興味を引き起こしたのは『性的生活』なのだ。文芸雑誌『昂』一巻7号(1899年7月)に発表された。『昂』といった雑誌はまさに周作人は日本にいたときよく読んでいたのだ。夏目、森鷗外の外に、周作人は「私は確かに『白樺』の影響をとても受けた。但しその影響は文芸の面のほうが多かった。」と認めた。白樺派諸子の中で、日本の研究者の山田敬三が『魯迅世界』に言ったように、「素質の面から言えば、周作人は武者小路にとても近いが、魯迅は有島武郎にもっと親近の感情を持っていた。」。周作人が武者小路実篤との更なる密接な関わりは五四運動以降だ、それについては後で述べる。

後になって、周作人は彼が日本語の勉強を中心にしたその時期の自学経歴をまとめたときに「日本語の勉強は大抵家庭で話したり、小説や新聞を読んだり、川柳や落語を聞いたりにして覚えたのだ。講堂での厳格な訓練がなかったが、裏には社会の背景があるから、比較的に覚えやすいような気がした。このように身に付けた言語は一本の草花のように、たとえ石竹でも根が付いた盆栽であり、生け花のダリアと違う。」と言っている。または「私は日本語の本を読むのは文字を通じてその中の知識を掴むだけなわけではなく、その物事に少し興味を持ったついでに文字も味わう。時に文字もそのすばらしさの一部になって、なかなか離れられない。」とも言っている。彼は最後に「私の日本に関する雑覧は情趣本位が多く、言うまでもなく態度も知識を求めるのと少々異なった。文字はある意味では門を叩く煉瓦のようでもあった。ただ煉瓦でもその模様や様式もちゃんと見る、用が足りて(を足して?)からすぐ捨てるとは限らない。」とまとめた。周作人は正に日本の風土人情と言語文字の趣味を探究する二重の熱情を抱いて、日本の民間俗文学から入って更に文人の雅文学の研究に進んで、表面から内面にへと日本文化に深く入り込むような道を歩んだ。その歩み方を通して辿りついたのは日本文化に対する相当深い会得(理解?)と相当深刻な

把握なのだ。それは同時代の多くの中国留日知識人がなかなか及ばないほどののだ。周作人は日本を深く知っている「日本通」と思われたの決して偶然ではない。

皮相しか見ていないことではなく、深く入り込んで、研究を極めたこそ周作人は日本文化に対する注目点は既に日本が外来文化を上手く吸収する特徴だけではなく（勿論周作人はその特徴を否認するわけではない）、日本文化自身の独立な特色なのだ。以降、日本文化を言及するたびに、周作人はいつも「日本古今の文化は無論中国と西洋から取り入れ、取捨調和の上自分のものとした。ローマ文明は出自がギリシアにあるにもかかわらず、自ら自分なりのシステムを築き上げたと同様にである（或いは日本はローマよりも成功した）。だから、日本は自らの文明がある、芸術と生活の面には更に顕著に見えるといっても言い過ぎない。」と強調している。周作人は日本語言語も自己の独立性を持っていて、「本来は日本語と中国語とは系統上に無関係で、ただ日本は中国文化を採用したから、漢字も借りて、今まで使っている。」と示している。だから周作人から見れば「日本語に漢字が交じっているのは中国人が深く日本文化を理解できない一つの障害なのだ。」、中国人に日本文化（日本語言語も含める）の独立性を見過ぎさせ、ただ中国文化（漢語）の附属とされる。周作人は彼の経験をまとめ、次の一点に帰結しているのだ。「本当に日本語を研究、把握すれば、言語もその生命があり、それに対して多少愛好と理解を持つことを知らなければならぬのだ。」と述べている。日本文化に対しても、同じようなことだ。愛好と理解の鍵は尊重にある、日本文化、言語の独立性を尊重するのだ。それこそ周作人が日本文化に対して（日本語も含めて）これほど深く把握できる本当の原因なのだ。

自分と異なる他人、異民族の独立個性を尊重することこそ、周作人は日本文化が外来文化と、特に中国文化との相通に対して、科学的に把握できたのだ。周作人が当初東京に着いて、日本の衣食住に対する初めての一瞥の印象だけが彼にこの相通を直感させた。現在、彼は日本の雅、俗文学、日本文化の蘊奥まで近づけば近づくほど、その親切感が強烈になってくる。彼は「多分文化が近いため、私はいつも日本文学が我々中国人にとっても比較的に近いような気がする。例えば短歌俳句及び日本趣味に富む散文と小説も我々は多少理解し、楽しむことができる。」と言っている。周作人は復古主義の観点から日本文化を観察した。中日文化の共通処から彼は東方文化の神韻を発見した。その時彼の目は已に中国一國、或いは中国、日本兩國に限らない、人類文化の組成部分としての東方文化に注目した。

それと同時に周作人はまたギリシア語を習い始め、西洋文化の起源としてのギリシア文化を研究した。彼は更にギリシア文化が日本文化、ひいては中国文化との間にもある契合が存在するのを発見した。正にこのような背景に、周作人は？の「ギリシア人はかつて裸が嫌なことをペルシア人と他の夷人の特性と思っている。別の（違う？）時代と風土のギリシア人といえる日本人も裸を嫌って避けようと思うわけではない。」と言った論断に濃厚な興味を持った。彼はそれによって連想して、「私はよく世間の靴類の中で最も善美なのは古代ギリシアの山大拉？であり、閑適なのは日本の下駄であり、経済的なのは中国南方の草履であるが、革靴類はその仲間ではない。それらはみな隠れたり、飾ったり、しないでたゞ自然に任せるが不適用や不美観でもない。」と語っている。「自然に任せる」こそギリシア文化、日本文化及び中国遠古文化の共通な特徴なのだ。周作人は後でまた彼が日本にいた期間にギリシア文化を研究した時、深く？の神話論観点の影響を受けて、「ギリシアの民族は祭司の支配を受けないで、詩人によって支配され、それらの粗末な素材を美の影像に修造しあげたと思った。」と語った。ギリシア文化に浸透した美に対する重視は日本文化にあった人情美とも似ているところがある。つまり、周作人が人類文化の発祥地としてのギリシアと中国及び中国文化の影響を深く受けた日本で、類似な文化特徴を発見したといえる。それは彼の「人類文化」という概念の形成に役立った。それで周作人は一家一郷一國一民族の角度から文化を考察する局限を抜け始め、一定程度の超越を獲得した。その超越は現代知識人にとって欠かせないものだ。彼は日本及び日本文化に対する感情も直観の親切感から新たな高度に上達した。――

われわれは留学に行ったとき、言葉が分からないまままで単身で外国の都会に入ったから、当然孤独困苦を感じたわけだ。でも私はそうではなかった。その地方と時代の空気にしばらくしてから協和を感じた。そして喜びを思った。だから私はかつて東京を私の第二の故郷と称して、かなり未練な気持ちなのだ。1911年春の間、作った詩の中で「遠遊不思帰、久客恋異郷。」と言った句があつて、正にその心情を表したのだ。

そこに、彼の出発点は日本文化と中国文化を人類同一文化類型として扱ったのだ。彼の「故郷」の概念と情感は既に極微妙な変化が起きたのだ。つまり、もっとと広範な人類愛を相対的に狭隘な故郷、民族愛の掛替えとした。その時期の周作人は基本的に言えばまだ民族主義だったにもかかわらず、この変化は周作人それからの発展に顕然に極めて重要なのだ。

## 六、赤羽橋のたもと

周作人は日本を発つ一年前の1910年に、彼が一冊の本を買った。書名は『遠野物語』であり、作者は日本の柳田国男なのだ。それは出版されたばかりの新書で、全部で三百五十部もある。周作人が持ったのは291号だ。表紙に少し墨痕があったので、換えてもらったら、店員はそれが通し番号で、順序によって売ることしかできないと言った。その小事は周作人がずっと忘れていない、晩年になっても興味津々で語った。最も忘れられないのは勿論その本が周作人に民俗学の豊富な趣味を示したのだ。特に柳田が強調した「郷土研究」は周作人を本当に一国の文化を理解しようとすれば、必ず普通の人民生活の大通りや横町に入り込まなければならぬことが分からせた。

1910年11月に、周作人は家族で本郷区から留学生の極少ない麻布区森元町に引っ越した。直接の原因は言うまでもない経済的な関係にあるが、柳田国男の「郷土研究」からの啓示も少なくとも一つ潜在の要素になっただろう。

周作人の話によりますと、本郷区は東京で「山手」と呼ばれ、山に接近している方で、山の手という意味である。西片町はもっと知識階級が集るところだった。周作人が泊まった呂之七号は夏目漱石が嘗て住んだ所なのだ。本郷西片町から麻布に引っ越して、喬木から出て、奥深い谷を迂回するとは言えないが、確かに根本的に環境を変えたのだ。そこはもっと平民に接近している。周作人は次のように譬えたのだ。本郷町に住んだとき二等列車に乗っているような気がして、各自紳士の格好をつけて、お互いに話し合いしない。森本町では皆列車の三等車両の乗客のようで、何の気取りもなく、会ったらすぐ挨拶したり、喋ったりして、日常生活であった瑣細なうわさやや俗事がそれで伝わってくるのだ。それ

こそ周作人が喜んで知りたいたいものだ。

周作人の話によると、彼が森本町で過ごしたのは「遊惰の生活」だった。それは周作人に最適な生活方式なのだ。昼間学校をサボった時（その時周作人は名義上なお立教大学の学生で、森本町は立教大学まで遠くない）、狭い二階の部屋に隠れている小説を読んでいた。晩ご飯を食べたら、付近の三田へ夜店を見に行ったり、神田や神保町あたりの古本屋を見回ったりした。周作人がずっと珍藏していた日本著名な俳句家の文泉子の『如夢記』は三田を散歩したとき偶然に購入したのだ。周作人はその本を売っていた書店が特に卑陋で、小学生だけをターゲットとしたようで、狭い本棚で不意その本を見つけたとたん、とても思いがけなかったと恍惚に覚えている。神田に行くには芝公園橋まで歩いて電車に乗って行く。電車の終点は赤羽だ。時に昼間に往來すると、帰りに芝公園橋駅より一駅早めの増上寺駅で降りて、山門に入って、寺の左側を歩いて、裏門を出たら、芝公園になる。公園を抜けてアパートに着く。周作人の話でその道は「都会山林」と称されるに足りる、特別な風味があるのだ。ただ夕方になると裏門が閉まるので、夜間は利用できない。周作人は三十年あまり後書いた『留学の思い出』の中で「私はその何本の道に何となくとても未練に思った。そのような例は母国で却って少ない。ただ南京の学校にいたとき、日曜日休みの日城南へ遊びに行つて夜帰りに鼓楼から三牌楼までの間の道路は両側に高い木がぎっしり立っていて、濃い木陰で覆って、人声も聞こえないひっそりした。まるでいつ緑林豪侠が木の裏から飛び出しても可笑しくないので、我達二三人の仲間でその中を歩きながら話したりして、日本と違った光景だったが、まだ深く覚えているのだ。それは多分比べられるぐらいの道なのだ。」

勿論、最も忘れられないのはそちらの人々なのだ。例えば、近隣の表具師の娘さんがとても周作人の興味を引き起こした。彼女は継母と不仲なので、だんだん「不良少女」になっていった。毎日午後になって、横町から男の子の口笛が聞こえると彼女はひっそりと家を出て、付近の芝公園に行つて男女の仲間同士と会合する。晩に父親が帰ってきて、継母の苦情（訴え？）を聴いて、例のように怒鳴ったり、殴ったりしても、なんにもならないだろう。次の日の同じ時間にまた口笛が聞こえてくると弱小な心霊がまるで符呪をかけられたように思わず知らず飛び出してしまった。結局またいつもの通り大騒ぎで終わる。近所の人は彼女に「あなたも少し素直にすれば良いじゃない、そうするとお父さんがそんな

に怒らないで済むだろう。」とアドバイスしたら、彼女はにこにこ笑いながら「あなたは外の遊びがどれほど面白いのかは知らないから。」と答えた。周作人はそばでそれを聴いてもおもしろく思った。彼はこの日本の女の子の答えが確かに思索し、味わうに値すると思っていた

赤羽橋の左側に床屋があった。周作人もよく行っていたが、理容師とはあまり話をしなかった。その理容師は妻もあるそうだが、一人で住んでいた。店は施設や内装がかなり凝っていて、とても清浄だったが、それなりに値段も格別に高かった。彼が精神病にかかっていると言ったうわさが伝わっているが、周作人は二三週間おきに一回そちらに行っても、彼が何か異常な行動とか一切見たことがない。ただその人は性情が孤独で、捻くれているのが確かに疑いまいだろう。周作人は彼のことを「畸人」と呼ぶ。それも庶民として登場人物の一人だと言えよう（言えるだろうか？）。

では、周作人はそういうような人混みの中で暮らすのはとても自在自適だったはずだ。残念なことにその時書いた文章は已に残っていない。周作人は晩年『知堂回想録』を書いた時、故紙の中から一枚を見つけたが題目がなかった。内容は次のようになっている。

庚戌秋の日、家内と彼女の弟重久、保坂おばさんと

ともに大隅川へ釣りに行く。蓬莱町を通って、駒入病院の前に出た。途中しだいに静かになってきて、道路も狭くなったがまだ車両が十分通れる。

両側はみな樹木と雑草で、まるで山嶺の間を進んでいるようだ。突き当りの懸崖の上に出たら、田端になった、にわかには豁然たる眺めが目に入ってきた。田野が羅列していて、草色が尚青くて、家屋が点々とその中に散らばっている。左折して、崖を沿って降りると大通りになった。両側は小川が涓涓と流れている。しばらく行って、突然雨が降り出した。雨具が足りないため、躊躇してからまた決行した。前に農家の雑貨店が見えて、竹笠を求めるつもりで行って、声をかけても誰もいな

かった。重久が雨でも自分で行くと言ったから、果物や餌を分けてあげて行かせた。私たちは先に戻ることにした。また田端駅に行って電車に乗って巣鴨に着いた。そこで馬車を待っていたがなかなか来なくて、保坂おばさんは先に行くと言って別れた。またしばらくしないで馬車が来た。おばさんがまだ遠くまで行っていないと思って、乗りながら路上に気をつけた。前に荷物を持って歩いている人があって、呼んでみたらまさにおばさんだった。一緒に乗って鈴木亭前で降りた時、雨がもう殆ど止んだ。家に帰って凄くお腹が空いた。お握りを食べたたら本当にそれまでそんなにうまいものを食べたことがないほどおいしかった。しばらくして、雨がまた激しく降った。夕方重久も帰ってきた。川辺に着いて雨が尚激しいから羽太家まで歩いて傘を借りて帰ってきたと言ってくれた。持っていた餌や竿などすべて捨てた。その日は月曜日で、十月頃だった。

それは既に本物の日本の「写生文」なのだが、周作人はまだユーモア趣味が足りないと感じた。いずれにしても、周作人は相当に日本化した、それとも彼はようやく自我と日本文化（及び中国伝統文化）との接点（契合点？）を見つけたといえる。それこそ最も重要なのだ。

だが、今回日本留学生活の最後の印象は周作人の日本観に影をつけた。それは1910年1月24日のことだった。周作人は立教大学の赤門前を歩いていた際、いきなり新聞の号外の呼び売り声が聞こえてきた、買って見たら驚愕しすぎて思わず立ち止ってしまった。新聞に載せたのは「大逆事件」についての裁判と執行の記事なのだ。当局は共謀「大逆」（つまり天皇暗殺計画）を理由に突然秋水幸徳初めの無政府主義者、社会主義者を二十四名逮捕した。無関係者を含め二十四名が全部死刑を宣告された。翌日、また天皇からの特別命

令で減刑され、半分の人だけ処刑され、半分の人は無期懲役に改められた。それは天皇陛下の厚い恩徳を示すためだそう。その手段は実に凶悪で憎むべきだ、そして実に哀れなほど下手なので、周作人は大驚いた。しかし、その事件が確かに赤裸々に日本現実生活の中であった反人道的な一面も暴露した。それで周作人は日本文化にある封建武断専制の影を隠隠と感じ取った。若干年後、彼は再び永井荷風が大逆事件後書いた「現在、時代が已に全部変革したと言われたにもかかわらず、要するにただ外観にすぎない。もし合理的な目で観れば、その外衣を見破ると武断政治の精神が百年以前と全く同じものだ（ちっとも変らない？）。」と言った話を読んだとき、周作人はとうとう「日本が一つの東方国家として、中国と同じく封建武断政治精神の伝統の重荷を背負っている、それで東方国家の変革が空前に難しいと覚悟しないわけにはいかないと分かった。それを意識した周作人は格別に重苦しく感じ、其の思いは彼を理想から現実に戻させ、記憶に残った多くの良い印象を損なった。……